

邪馬台国 魏使行程に関する最終提言

REV. 2 2026年2月05日

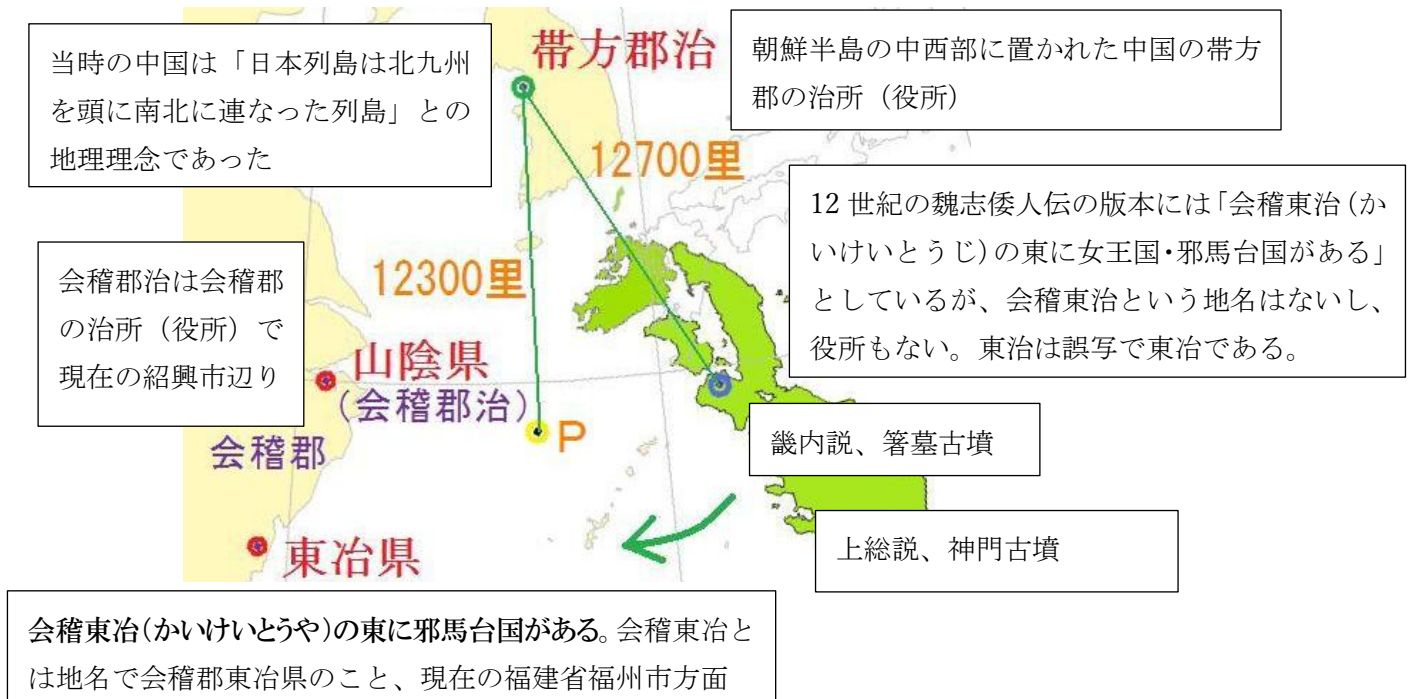
我部山民樹 (かべやまたみき)

1. はじめに

未だに邪馬台国は特定されていない。女王卑弥呼やその都・邪馬台国を巡り、魏志倭人伝の曖昧さ故に誤認、誤記・誤写、後世の改ざんがあったとして、種々の仮説を唱え、中には結論ありきでそれに合致するように誤認、誤記、誤写説を唱えるので、今や邪馬台国は100か所を超える候補地があげられ、「百家争鳴」を通り越して「馬鹿騒ぎ」だと評する方もおられる。その主な要因は、魏使倭人伝の「不弥国から南に水行20日で投馬国に至る、投馬国から南に水行10日陸行一月(ひとつき)で女王国に至る」である。それでは女王国がはるか南の沖縄辺りに位置することになってしまうので、後世の人達に魏志倭人伝にはとんでもない誤認、誤記、誤写があるということだけではなく、「魏使の嘘つき」とまで思われてしまったためではなかろうか。魏志倭人伝は著者・陳寿が倭国に赴いた魏使の報告書に基づいて書いたとされるが、他の信じ難い伝承や逸話のような情報も織り込んだので、それも嘘つきとされることに拍車をかけたのかもしれない。

正確な日本列島の地理を知っている後世の我々日本人が、地図のなかった当時の諸事情を推し測ることが不十分なまま、それこそ気軽に、ためらうこともなく仮説を立て、時には魏志倭人伝に書かれていることを無視してしまうこともあり、結果的に多くの説を産み出すことになってしまったのであろう。専門家の方ばかりでなく、筆者のように幻の邪馬台国探しをおおいに楽しんでおられる御仁もまた邪馬台国論争に参加し、自説を唱えておられるようだ。しかし原点に戻って魏史倭人伝の解釈を見直すことにより、邪馬台国への魏使の行程を絞り込めないだろうかと思いつめていた。

そんなとき、伊藤邦之著「邪馬台国は上総にあった！」を図書館で借りてきた。この説で卑弥呼の墓に比定している市原の神門(ごうど)古墳のことをよく知っている筆者は、それはあり得ないと思っていたので読む気がしなかったのだが、その検証方法に興味を覚えたので思い直したのだが、その中の日本列島倒錯説に興味を覚えたので、その概要を示す



① 「計其道里 當在会稽東治之東(その道里を計るに、まさに会稽東治の東にあるべし)」の項に対する、謝銘仁著「邪馬台国 中国人はこう読む」の一文を紹介している。「会稽東治(かいけいとうち)

は会稽東冶（かいけいとうや）の誤りであり、「東冶」は福建省福州市方面の地名」とある。それで女王国は台湾辺りの東に位置するとしている。

② 3世紀当時、「日本列島は九州を頭に南北に連なった列島である」という地理理念であったので、魏使一行は、実際には不弥国から東に向かったのに南に向かったと認識していた。

③ 不弥国から瀬戸内海を吉備国（投馬国と比定）経由で水行すると30日で大阪に至る。

④上総国は大阪から陸行一月（ひとつき）の行程の範囲にある。3世紀中頃築造の前方後円墳は少なく、奈良県以外では上総（市原市）の神門（ごうど）古墳だけであり、卑弥呼の墓に比定できる。

この上総説についてはあとで触れることにする。

「東冶」の誤写説と当時の日本列島の地理理念について検証して、その説に納得が得られれば、次にその地理理念を前提に、魏志倭人伝を読み解き、魏使一行の邪馬台国までの行程を探ることにする。

○検証の前提

我々が読むことができる現存最古の魏志倭人伝は南宋時代（1127～1279年）の版本であり、紀元280～297年間に魏志倭人伝が成立してから、筆写が綿々と繰り返されてきたので、全く誤写が無かったとするには無理があるかもしれない。それで検証を進めていくうちに、もし誤記や誤写、改ざんがあったと思われる箇所思い当たった場合には、納得のいく説明ができればその仮説を採用することにした。勿論のこと安易な仮説は立てないつもりである。

○検証の仕方

発掘した遺跡や古墳の資料を用いて魏志倭人伝に書かれている卑弥呼の墓候補や宮室（宮殿）候補を絞り込み、魏使の邪馬台国までの行程を検証する。

○魏志倭人伝

魏志倭人伝とは通称であり、中国の史書「三国志」のうちの「魏志」で、烏丸（うがん、ちゅごく北部にの民族）、鮮卑（せんび、中国北部と東北部の騎馬民族）、東夷（中国北部の異民族の総称、秦以降は朝鮮半島・日本列島などに住む異民族を指す）伝の倭人の条のことである。「三国志」の著者は西晋（265～316年）の陳寿（ちんじゅ、297年死去）、成立は紀元284～289年とされる。陳寿は西晋の支局の長官で、魏から引き継がれた西晋王朝の史料を自由に利用できる立場にあった。倭国に20年（247～266年間）も滞在した魏の正使・張政の詳細な報告書（観察記録）を重要な資料として陳寿が（そこから抜粋して）魏志倭人伝を著したとされる。

また張政は単なる使者ではなく、軍人として遣わされたので、一行は軍団として派遣されており、援軍を送ることや物資の補給が必要なため、張政の報告書は邪馬台国（やまたいこく）への行程の正確な情報が伝わるものであったとの説がある。

魏志倭人伝の本文は2千字程で、倭国、女王・卑弥呼（ひみこ）やその都・邪馬台国等について記されている。

なお念のためだが、魏志倭人伝に出て来る国名、地名、人名は全て中国側が一方的に付けた名前である。

魏志倭人伝に

「正始元年（240年）、（204～313年間存在した帯方郡の）太守、弓遵（きょうじゅ）は建中校尉（けんちゅうこうい、魏の武官の名）の梯儁（ていしゅん）等を派遣し、梯儁等は詔書、印綬（＝親魏倭王という地位の認証状と印綬）を捧げ持って倭国へ行き、倭王に授けた。並びに、詔（＝制詔）をもたらし、金、帛、錦、罽、刀、鏡、采物を下賜した。倭王は使に困って上表し、詔の有難さに感謝の意を表した』、また『正始八年（247年）、（弓遵の戦死を受けて）王頌が帯方郡太守に着任した。倭女王の卑弥呼と狗奴国の男王、卑弥弓呼素とは和せず、倭の載斯烏越等を帯方郡に派遣して、互いに攻撃しあつ

ている状態であることを説明した。(王頎は) 塞曹掾史 (さいそうえんし、魏の時代における役職で、特に倭国との外交において重要な役割を果たした官吏) の張政 (ちょうせい) 等を派遣した。それにより詔書、詔書、黄幢 (こうどう、魏の正規軍を示す旗で魏の後ろ盾を示す) をもたらして難升米 (なしめ、太夫) に授け、檄文 (ともに立ち上がって戦おうと人々に呼びかける文書) をつくり、これを告げて諭した』とある。

魏使一行が確かに倭を訪れていたことが分かるし、魏志倭人伝を読み進めると魏使の見聞に基づいた報告書がベースになっていて、他の先行史料や逸話を併用し、更には著者・陳寿自らの考えも書き入れていることが伝わってくる。

○関連する史料

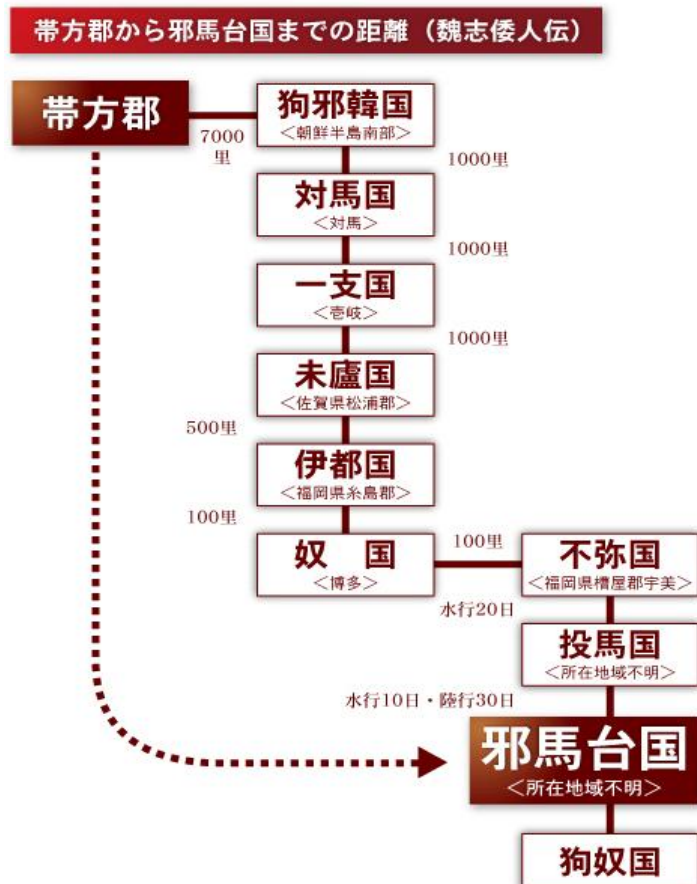
中国の王国	成立または刊行 年	備考
周(紀元前 1046 ～紀元前 256 年)		尺貫法を定める 周の距離の尺度は短里の 1 里 = 70～90m であり、80m とする
後漢 (25～220 年)		<ul style="list-style-type: none"> ・後漢の距離の尺度は長里の 1 里 = 430m ・後漢書に「57 年、倭の奴国の使者、洛陽に至り、光武帝より印綬を受ける」とある。(漢委奴国王印) ・後漢書に「107 年、倭国王帥升 (すいしょう) ら生口 160 人を献上」とある。
魏 (220～256 年)		<p>距離の尺度は長里だが、魏志倭人伝は短里を使用したとされる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・146～189 年、魏志倭人伝に「倭国大乱、女王卑弥呼を共立」とある。(桓帝・靈帝の治世の間 (146 年 ～ 189 年) である) ・240 年、魏志倭人伝に「魏使・悌儁 (ていしゅん) が倭王・卑弥呼に拝仮 (皇帝の代わりに会うこと) する」とある。 ・247 年、倭人伝に「魏使・張政 (ちょうせい) 一行が、邪馬台国に至る」とある。 ・266 年、倭人伝に「壺与 (台与) は倭の大夫で率善中郎将の掖邪拘等二十人を派遣して、張政等が帰るのを送らせた。そして、臺 (中央官庁) に参上し、男女の生口三十人を献上し、白珠五千孔、青大句珠二枚、模様の異なるいろいろな錦二十匹を貢いだ。」とある。倭人伝には年代が書かれていないが、晋書に「266 年に倭女王が西晋に朝貢した」とある。帰任する張政らに使者を同行させて朝貢したとあるが、年代が書かれていない。しかし晋書に 266 年に倭女王が西晋に朝貢したとあるので、張政一行はこの時に帰国したので、張政らは 20 年ほど倭国に滞在したことになる。
呉 (222～280 年)		魏の南に接する

西晋 (265～316年)	280～316年間に成立	<ul style="list-style-type: none"> ・266年、晋書に「倭女王が西晋に朝貢した」とある。同時に魏使・張政が魏を引き継いだ西晋に帰国したのだろう。(魏も西晋も首都は洛陽である) この場合、陳寿は張政より直接に報告を受けた可能性がある。 ・280～297年頃、陳寿 (233～297年) により正史・三国志(に魏志倭人伝がある)成立。 三国志の原本は残されていない。12世紀の版本の紹興本が現存最古である。
南朝宋 (420～479年)	398～445年間に成立	後漢書(に倭伝がある)が成立 范曄 (はんよう) による。
北宋 (960～1127年)	1002年	・三国志が初めて刊行されたが、現存していない。
南宋 (1127～1279年)	1131～1162年 (紹興年間)	・南宋時代に印刷された魏志倭人伝の「紹興本」と呼ばれる版本は現存最古のものである。

魏志倭人伝では、女王卑弥呼は247～248年に死去したとされている。

2. 魏使の行程について整理する。

○魏使の行程 (該当する地域については諸説ある)



・帯方郡

204年から313年の109年間、古代中国によって朝鮮半島の中西部に置かれた郡。郡の長が太守であり、その配下の官吏と軍団の在する郡役所が郡治である。

・狗邪韓国…韓国慶尚南道辺りと想定する。

「(帯方) 郡から倭に至るには、海岸に従い水上を行く。韓国を通り過ぎ、南へ行ったり東へ行ったりして、その(=倭の) 北岸の狗邪韓国に到着する。七千余里である。」

・対馬国…対馬島である

「(狗邪韓国から) 始めて一海を渡り、千余里で対海(対馬) 国に至る。その大官はヒコウといい、副官はヒドボリという」、居する所は、近寄り難い島で、およそ四百余里四方。土地(対馬国、対海国) は、山が険しくて深い林が多く、道路は鳥や鹿の道のようなようである。千余戸の家がある。良田は無く海産物を食べて自活している。船に乗って九州や韓国へ行き、商いして穀物を買っている」とある。

この時代、九州諸国は朝鮮半島と頻りに交易していたことが分かる。

・一支国…壱岐島である

「(対海国から) また、南に一海を渡る、千余里、名はカン海という。一支国に至る。官は、亦(対馬と同様)、ヒコウといい、副はヒドゥボリという」

・末盧国…佐賀県唐津市辺りと想定する。

「(一支国から) また、一海を渡ること千余里で、バツロ国に至る。四千余戸があり、山と海すれすれに沿って住んでいる。草木が盛んに茂り、行く時、前の人が見えない。魚やアワビを好んで捕り、水の深浅にかかわらず、皆、潜ってこれを取っている」とある。

この時代の古代道はまるで現代の登山ルートのようなようだ。

・伊都国…福岡県糸島辺りと想定する。

「(末盧国から) 東南に陸上を五百里行くとイト国に到着する。官はジシといい、副はエイボコ、ヘイキョコという。代々、王があり、皆、女王国に属し続けている。(帯方) 郡の使者が往来し、常に滞在する所である。千余戸が有る」、また「女王国より北は、特に一人の大率を置いて検察する。諸国はこれを恐れはばかっている。常に伊都国で政務を執っている。(魏) 国中に於ける刺史(監察官) のような地位である。」とある。

邪馬台国を除いて、伊都国だけが王がいて、官がいて、副官2名(他の国は1名) がいたこと、(帯方) 郡の使者が往来し、常に滞在する所であること、女王国が一人の大率を置いて、諸国を監察させていることから、伊都国は特別な国であったことが分かる。

諸国は九州諸国であり、そこで一大率が諸国を監察していることから、女王国がはるか遠方に位置することが分かる。

・奴国…福岡市辺りと想定する。

「(伊都国から) 東南、ドウ国に至る。百里である。官はシバコといい、副はヒドゥボリという。二万余戸がある」とある。

・不弥国…宗像市辺りと想定する。

「(奴国から) 東に行き、フウビ国に至る。百里。官はタボといい、副官はヒドゥボリという。千余りの家がある」とある。

・投馬国…不明(諸説ある)

(不弥国から) 南、投馬国に至る。水行二十日である。官はビビといい、副はビビダリという。およそ五万余戸」とある。

・邪馬台国…不明（諸説ある）

「(投馬国から)南、邪馬壱(ヤバキ)国に至る。女王が都を置く所である。水行十日、陸行一月である。官にイシバがある。次はビバショウといい、次はビバクウシといい、次をドカテイという。およそ七万余戸」とある。

狗邪国…不明

「(女王国の)南に狗奴(コウド、コウドウ)国があり、男子が王になっている。その官に狗古智卑狗(コウコチヒコウ)がある。女王には属していない。帯方郡から女王国に至るには、万二千余里である」とある。

魏使は様々な国を経由して邪馬台国に至ったが、倭人伝に書かれている国は、敵対する国を除いて、魏使がそのクニの高官に会った場合に限定されている。そして高官から得た情報を報告書に書き入れたと解釈できる。従い当時一大勢力だった国の名が書かれていないのは、その高官と面会していないということが理由と思われ、何の不思議もない。陳寿が字数制限をして絞り込んだ可能性はあるかもしれない。

方位についてだが、羅針盤が文献に出て来るのは11世紀以降であり、当時は羅針盤もなく、天文学もまだ発展途上だった可能性があり、方角の測定手段は太陽に移動により東西方向を決め、それも山とかの目印によりおおよその方角を定めるのであれば、地域ごとに方角は多少異なった可能性もある。その程度の方角認識で、当時の生活には支障が無かったのかもしれない。基本は東西南北だけであり、どちらつかずの場合、例えば東南も使うことがあるが、南南東までは使わないのだろう。その大まかな方向を示していると解釈すれば、現代の方角認識との差異を検証上考慮する必要はないと思われる。

狗邪韓国から末蘆国までの地理認識(朝鮮半島の西海岸沿いをほぼ南方向に向かい、狗邪韓国から島伝いにほぼ南方向に進行すれば末蘆国に到達する)は現在の我々の地理認識にほぼ近いと思われる。狗邪韓国から末蘆国、不弥国までは使者の往来があり、交易も対馬国を経由して盛んに行われていたからであろう。問題は不弥国以降である。

3. 「会稽東冶」の誤写に関する検証、そして「日本列島が九州を頭に南北に連なった列島であるとの地理理念」に関する検証

① 「会稽東冶」は誤写か？

3世紀末、『三国志』中の魏志倭人伝は西晋時代(280~294年間)に成立したが、現存する版本は南宋時代(1131~1162年間)に発刊された複製本である。

12世紀の版本によると

「計其道里當在会稽東冶之東」は、「女王国(邪馬台国)までの)道里を計ると、まさに会稽東冶(かいけいとうち)の東」であり、現在の蘇州市、紹興市辺りの東方向となる。且つ末蘆国や不弥国の南となると鹿児島南端辺りである。

また5世紀の『後漢書』(432~446年成立)の(魏志倭人伝をまとめた)倭伝に「其地大較在会稽東冶之東」とあり、「その地(邪馬台国)はだいたい会稽東冶(かいけいとうや)の東」である。現在の福州市辺りの緯度で且つ末蘆国や不弥国の南となると沖繩辺りとなる。

以下に、会稽東冶か会稽東冶についての資料を示す

・魏志倭人伝以外の「三国志」には東冶(とうや)という文が以下のように最低でも5文ある。

具体的には

「朗自以身爲漢吏、宜保城邑、遂舉兵與策戰、敗績、浮海至東冶。」

『三國志』卷13『魏志』13 王朗

策曰：「虎等羣盜、非有大志、此成禽耳。」遂引兵渡浙江、據會稽、屠東冶、乃攻破虎等。

【賀齊】

時王朗奔東冶、候官長商升為朗起兵。

【呂岱】

會稽東冶五縣賊呂合・秦狼等為亂、權以岱為督軍校尉、與將軍蔣欽等將兵討之、遂禽合・狼、五縣平定、拜昭信中郎將。

四年、廬陵賊李桓・路合・會稽東冶賊隨春・南海賊羅厲等一時並起。

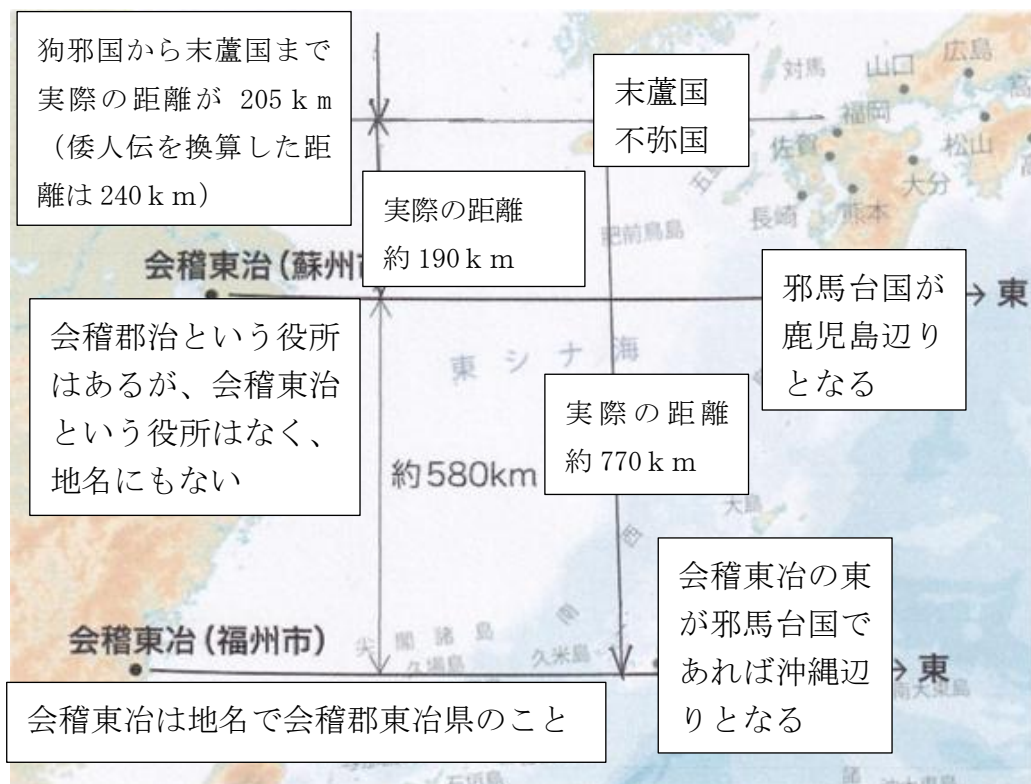
『三國志』卷60『呉志』15 賀全呂周鍾離傳」である。

これにより、三国志の『魏志倭人伝』のみが「東冶」（とうち）であり、他の五つは「東冶」（とうや）である。

・謝銘仁著「邪馬台国 中国人はこう読む」によると「会稽東冶（かいけいとうち）は会稽東冶（かいけいとうや）の誤りであり、（東冶）は福建省福州市方面の地名である。

・魏志倭人伝の版本は会稽東冶の誤植であるという説がある。その理由は

「版本は綿々と筆写された手書き複製を宋代に印刷したものであるから、それまでのある時点で筆写時に誤りが生じたものと思われる。また「東冶」という地名がないこと、（会稽東冶の）東にあるということから「東冶」は地名として出しているのに、会稽東冶は（会稽の東の）冶所（政務を行う場所）というあいまいな場所で示す理由がないこと、三国志には会稽と東冶はセットで登場することなどで東冶は誤植である」という説がある。



以上より、会稽東冶という地名もないし、役所もない。3世紀末に陳寿が全て東冶と書いていたのに、後に魏志倭人伝を筆写した段階で誤写した可能性が高い。5世紀に范曄も東冶と書いているので、それ以降の誤写であると判断される。

素直に解釈して結論を出せば東冶であろう。中国の人が魏志倭人伝を読めば、東冶は東冶の誤りと解釈するが、誤写と気づかない後世の日本人が、東冶という地名が無いために苦慮し「会稽の東にある治所(政務をとる所)の東」という解釈を入れたのではないだろうか。

「会稽の東にある地所の東」だと東が重なるので、「会稽東冶とした。陳寿の造語である」との説もある。これは一例だが、このように魏志倭人伝に関して半ば強引とも思える仮説を一体どこまで繰り広げるのだろうか。「会稽郡治の東」と書けば済む話である。

それに「計って邪馬台国が会稽東冶の東」とあるが、その里程の算出のベースは魏使の報告にある「南に水行 30 日陸行一月」以外には考えられないし、それをベースに里程を算出したのは陳寿であり、その距離感からして陳寿は、「邪馬台国は会稽東冶の東」と書いたはずである。

これらのことから、素直に解釈すれば「東冶(とうち)が誤写で、東冶(とうや)が正」であることに疑問の余地はない。

5 世紀の范曄は東冶と書いているので誤写は後漢書以降に魏志倭人伝を筆写したとき、または版木を彫る段階であろう。版本は南宋時代(1127~1279 年)に製作されている。そのうちの紹興本と呼ばれる版本が現存する最古の魏志倭人伝である。

長年に亘り綿々と魏志倭人伝の写筆が行われたので、誤写があっても不思議ではない。

いかにも‘にすい’と‘さんずい’は誤写し易いし、筆書きの場合は見分けがつきにくい。うがち過ぎかもしれないが、版木を掘る人は漢文の専門家ではないので、誤写する可能性が高いと言えるのではなからうか。

②「日本列島が九州を頭に南北に連なった列島」との地理理念は？

魏使一行が最後の一月(ひとつき)は陸地を通行したと認識している魏志倭人伝の著者・陳寿が女王国は会稽東冶の東、すなわち沖縄辺りの位置と認識しているので、日本列島が九州を頭に南北に連なった列島という地理理念を以前から持っていたのは間違いないだろうし、その理念を持っている陳寿が倭国の地理について何ら触れていないのは、周囲の人々も「倭国は九州を頭にして南北に連なる列島という地理理念」をすでに持っていたので、改めて説明する必要性が無かった」ということになる。後漢書の著者・范曄も距離感からして邪馬台国が会稽東冶の東ということに違和感を抱かなかったのであろう。我々も実際の地理を知らなければ、疑念を抱かなかったかもしれない。

倭国の役人に案内された魏使一行が、不弥国から邪馬台国に向かうルートの方角を南方向と誤認したのではなく、南に進行したと思い込んだからだろうし、そのように思ったのは日本列島が九州を頭に南北に連なっているとの地理理念を持っていたからかもしれないが、しかし魏使が太陽の軌道により方角の誤認を判断できたはずだとの疑念がある。太陽の軌道を見た一行は当然ながら違和感があり、疑問を抱いたのではないかと思われる。もし疑問を抱いたとしても、皇帝をはじめ中国の人達が倭国は南北に連なる列島と信じ込んでいる状況下で、それを覆すだけの論拠を持たない魏使は敢えてそのことには触れずに地理理念に従った報告をしたのであろうと推測する。倭国はもっと南に位置すると認識していた魏の皇帝らが、倭国を味方にすれば(南に隣接し)敵対している呉を挟撃できると期待していたとしたら、魏使は尚更のこと地理理念について触れなくなかったであろう。

実際の地理が分かっている現代の日本人の感覚で以って、この地理理念を理解することはとても難しいのであろうが、我々はそれを受け入れるしかないだろう。

くどいようだが、日本列島を地図で理解している我々とは異なり、日本列島は、当時の人達がとても思い浮かばないだろうと思える弓状の特殊な形状であり、北九州が朝鮮半島に最も近く、それ以降の国は不弥国から遠ざかっていく。遠ざかる方向は東か南、あるいは東南であると思いつくだろうが、当時の人々が何故南と認識したかについては疑問が残る。が、九州の南の日向国(宮崎県)等と交易があ

って、日向国の役人らが南から北上してきたために、倭国はその先も南に連なっていると思っただのかもしれない。

15～16 世紀にコペルニクスが地動説を唱えるまで長い間天動説が信じられてきたのと同じとまでは言えないまでも、そのような誤認は有り得ることなのだ。

まとめると「南としたのは誤写ではなく、魏志倭人伝の作者も 5 世紀の後漢書の編者ともに邪馬台国が不弥国(宗像市辺り)の南に位置していると認識していた。すなわち当時の人達の地理理念は日本列島が九州を頭に南北に連なっている」ということである。方角の誤認ではない。

ところで、この地理理念は少なくとも遣隋使を派遣した奈良時代までには修正されている。例えば、7 世紀から 8 世紀に築造されたとされるキトラ古墳から世界最古の天文図が発見されたが、現代の天文学者により観測場所は高句麗の都や百済の都に近い所だと特定されている。天文学者らは天体を観測した場所が分かるので、この頃には、緯度の違いにより南北方向の距離は測定できたのだろう。キトラ古墳の天文図を描いたのは渡来系の人物だろうが、少なくとも奈良時代には倭国でも天文学が普及し、ある程度それを応用していたのであろう。

4. 魏志倭人伝の里程について

不弥国までは水行と陸行ともに里程となっており、その後は水行も陸行共に日数となっている。それに狗邪韓国から里程として書かれているのは、水行千里、陸行百里、陸行 5 百里、水行 10 日、水行 20 日、陸行一月 (30 日) と 10 日飛ばしであり、特に水行は再現性が悪いらしく、当時は大体の目安が分かればよかったのだろう。現代人が現代の感覚で議論する問題ではないのかもしれない。

この里程表現はまことに奇妙なのだが、二つのことが考えられる。

①不弥国以降の行程を日数としているのは魏使らが里程を測定する知識や技術を有していなかったからであり、それ以前の海上も測定出来なかったので報告書には全て日数で記載していたことを示している。陳寿が魏使の報告書以外に複数の先行史料を使用し、その里程を使ったのであろう。大陸と倭国の北九州の不弥国辺りまでのクニと交易が盛んであり、交易者らが天文学等を駆使するとかにより、狗邪韓国からの海上の里程を測定したが、再現性や精度を考慮して最小単位を 1000 里としておおよその里程を記載したのであろう。(単純に一日を千里とした可能性も無きにしもあらずか?) 倭国に上陸した後、不弥国までは最小 100 里は、最小単位の 100 里とし、おおよその里程として記載したとも思える。陸上では単距離間なら歩測も可能だったし、長距離の場合は、線香 1 本で二時間なので線香を焚いて距離を算出することも可能だったので、陸上は海上より里程の精度が高かったと推測できる。それで最小単位に違いが出たのかもしれない。

②別の見方をすれば、里程を理解するための目安として単純に移動日数 5 日くらいまでは、最小単位 (海上は千里、陸上は百里) × 日数でカウントしたのだろう。日数は 1 日、5 日、15 日や 25 日を使わない大まかな日数で、6 日以上は 10 日、20 日、一月 (30 日) くらいの 10 日飛ばしで大まかな掴み方をした可能性がないとは言えないのではなからうか? 天候や海の荒れ具合、歓待を受けるとか不確定要素が多く再現性が乏しいので、当時はその程度の表現で十分だったのかもしれない。そうすると一日で移動した場合は (陸行) 百里であり、陸行一日という数え方はないことになる。とすれば魏使は投馬国から「水行 10 日陸行一月」と記述していたことになる。何の確証もない話だが。

○里程の換算と行程のまとめ

古代中国の尺貫法における距離の単位

周代の短里…で 1 里は約 70 メートルから 90 メートル。魏使倭人伝ではこの短里が使用されているとされる。

漢代の長里…1里は400～500メートル

魏尺は約24.19センチメートルとされている。里は「尺」を基準にしており、一般的には「1里は300尺」とされているようだ。魏の「里」は「短里」と呼ばれる概念もあり、これは「1里が70～90センチメートル」とされることが多い。魏時代（西暦3世紀）頃の『1歩』は『6尺』である。当時の『1尺』は24.12cmといわれるので、6尺は1.4472mとなる。歩100歩は144.72mになる。

魏尺は24.19センチとされている。

○水路の里程（狗邪国～末蘆国）をまとめる

国名 (候補地)	里程	実際の距離	後漢の距離の尺度とする。 1里=430m	周の距離の尺度(短里)とする。 1里=70～90m 80mとする
狗邪国(韓国慶尚南道辺りとする)～対馬国	海路1000里余	90km	430km	80km
対馬～一大国(壱岐島)	海路1000里余	90km	430km	80km
一大国～末蘆国(佐賀県唐津市辺りとする)	海路1000里余	45km	430km	80km
計	3000里余	205km	1290km	240km

候補地は諸説あるが、短里であれば実際の里程とおおむね合致しているようである。

○陸路の里程（末蘆国～不弥国）

国名 (候補地)		実際の距離	後漢の尺度(長里)とする。 1里=430m	周の尺度(短里)とする。 1里=70～90m ここでは80mとする
末蘆国(唐津市辺り)～伊都国(福岡県糸島辺りとする)	陸路500里	30km	220km	40km
伊都国～奴国(福岡市辺り)	陸路100里	25km	43km	8km
奴国～不弥国(宗像市辺り)	陸路100里	30km	43km	8km
計	陸路700里	85km	336km	56km

最小単位を 100 里としても実際と合わないようだが、果たして本当に測定したのだろうかとの疑問が残る。候補地のみならず古代道路も検証すべきであろうが、あるいは②のケースであれば、実際の距離との差異については理解しやすい。

おおむね短里が妥当であると言える。

5. 3 世紀中頃築造の卑弥呼の墓候補の古墳

古墳は放射線炭素 14 年代測定法により築造時期が特定されている。3 世紀中頃に築造された古墳を対象に、径 100 歩(145メートル)の卑弥呼の墓として円墳または前方後円墳を対象に検証すべきである。奴婢 100 人余の殉教者 100 名余の遺骨または痕跡、金印、銅鏡等が発掘されれば卑弥呼の墓と特定される。百人余が眠る墓なのでそれ相当の大きさである。それに、前方後円墳のほとんどが 4 世紀以降のヤマト王権時代に築造されている。

	卑弥呼の墓 (魏志倭人伝より)	祇園山古墳	箸墓古墳	纏向石塚古墳
所在地		福岡県久留米市御井町 299-219	奈良県桜井市箸中	奈良県桜井市太田字石塚
規模	径 100 歩 (145 メートル)	方墳で、東西約 23.7 メートル、南北約 22.9 メートル、高さ約 6 メートル	前方後円墳で、墳丘長さ 278 メートル 後円部径 150 メートル	前方後円墳で、墳丘長さ 96 メートル 後円部径約 64m、周濠幅約 20m
築造時期	卑弥呼が死去した 3 世紀中頃	3 世紀中頃(卑弥呼の時代)	3 世期中～末(卑弥呼の時代にかさなる) 奈良県立橿原考古学研究所が行った事前調査で周濠の底から土器が多量に出土した。これの実年代について、奈良県立橿原考古学研究所は放射線炭素 14 年代測定法により 280～300 年 (±10～20 年) と推定している)	3 世紀 濠の最下層から出土したヒノキの板材の残存最外年輪の暦年は放射線炭素 14 年代測定法によって西暦 177 年との測定結果が出ている。しかし、年輪年代学の光谷拓実は、残存の辺材部の平均年代幅をもとに推計し、「その伐採年はどうみても 200 年を下ることはない」と結論づけている
出土品	想定されるのは、奴婢 100 余人の殉教者の人骨(あるいはその痕跡)、魏より卑弥呼が授けられた金印や銅鏡等	三角縁神獣鏡 (伝)・変型方格規矩鏡 (伝)、墳裾外周甕棺 1 号墓から後漢鏡片、硬玉製勾玉、碧玉製管玉、鉄製刀子、その	宮内庁職員によって、特殊器台形埴輪片、壺型埴輪片、有段口縁の底部穿孔壺形土器が採掘されてい	弧文円板、朱塗鶏形木製品

		他鉄製武器および農具	る。(年代測定ができる)	
備考		<ul style="list-style-type: none"> ・ 築造時期や規模から、宝賀寿男や地元研究者などにより、この古墳を邪馬台国の卑弥呼の墓に比定する意見がある。(形状、サイズそれに築造時期が異なることには触れていない) ・ 3世紀の邪馬台国時代に相当する遺跡や遺物は九州にも存在する。しかし、畿内で見られるような大規模な古墳群や、広域支配を裏付ける明確な証拠は見つかっていないとされている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 被葬者として宮内庁より第7代孝霊天皇皇女の倭迹迹日百襲姫命（やまとととひももそひめのみこと）(*1)の墓と治定（じじょう）されているので、発掘できない。 	被葬者不明

○箸墓古墳



*1. 倭迹迹日百襲姫命

日本書紀には「百襲姫（倭迹迹日百襲姫命）が驚き叫んだため大物主神は恥じて御諸山（三輪山）に登ってしまった。百襲姫がこれを後悔して腰を落とした際、箸が陰部を突いたため百襲姫は死んでしまい、大市に葬られた」とあり、神話上の人物を彷彿させる。また孝霊天皇の实在そのものが極めて薄いとされているが、その皇女は、その奇妙な逸話も考慮すれば伝説上の人物を彷彿させ、その实在はさらに薄いと言える。江戸時代に天皇陵として治定（じじょう）され、そのまま現在も踏襲さ

れているが、天皇陵に治定されていない墓を発掘した結果、天皇陵と判明した事例があるが、他の墓がその天皇陵と治定されたままである。他に築造時期が合致しない天皇陵もある。

6. 卑弥呼の宮室候補

○吉野ケ里遺跡復元建物



○幕向遺跡復元模型



魏志倭人伝には、

「王となってから、朝見のできた者はわずかである。侍女千人がいて、(指示もなく) 自律的に仕え、ただ男子一人がいて、飲食物を運んだり言葉を伝えたりするため、女王の住んでいる所へ出入りしている。宮殿や高樓は城柵が嚴重に作られ、常に武器を持った人が守衛している。」とある。

このことより、宮殿は侍女千人が侍ることができる大きさのもので、高樓や嚴重な城柵が作られていることが条件となる。高樓や城柵に関しては吉野ケ里遺跡を彷彿とさせる。

一方、幕向遺跡の復元模型からはそれを感じさせない。発掘がさらに進めば、もっと分かって来ることもあるかもしれないが。

○吉野ケ里遺跡模型



○纏向遺跡模型



また魏志倭人伝には、邪馬台国の戸数は70,000戸とあり、また「その習俗では、国の大人はみな四、五人の妻を持ち、下戸でも二、三人の妻を持つ場合がある」とある。少なめに見ても平均して6名/戸はいたのではなかろうかと思われるので、そうであれば人口は少なくとも420,000人くらいだったと推測される。7万戸が話半分としても210,000人である。考古学では当時の日本の人口が百数十万人とされているので、倭国最大の国だったと思われる。70,000戸という情報はおそらく魏使が、女王の都

のある邪馬壹国の官・イシバラより情報を得たのであろうが、女王国が強大な国であると誇示したくてイシバが戸数を誇大に伝えた可能性は大いにある。

いずれにしてもそれほどの大規模の遺跡のある候補地は少なく、現在発掘されている遺跡で邪馬台国の候補となり得る遺跡は以下の二か所のみである。

○代表的な大型建物遺跡

項	九州説の吉野ヶ里遺跡	畿内説の纏向遺跡
所在地	佐賀県神埼郡吉野ヶ里町戸神埼市にまたがる吉野ヶ里丘陵にある	奈良県桜井市の三輪山の北西麓一帯
遺跡の築造年代	紀元前3世紀から紀元3世紀まで	2世紀末から4世紀前半
環濠集落の規模	117平方メートルにわたる環濠集落	東西約2km・南北約1.5kmに及び大字辻・太田・東田・大豆越・草川・巻野内・穴師・箸中・豊前・豊田にまたがる。およそ楕円形の平面形状となつて、その面積は3km ² (300万m ²) に達する。
人口	後期には、環濠がさらに拡大し、二重になるとともに、建物が巨大化し、3世紀ごろには集落は最盛期を迎える。北内郭と南内郭の2つの内郭ができ、文化の発展が見られる。甕棺の数などから推測しておよそ1,200人、吉野ヶ里を中心とするクニ全体では5,400人くらいの人々が住んでいたと推測される。 (魏志倭人伝に書かれている70,000戸より少ない)	吉野ヶ里遺跡の規模より広大であり、それ相当の人口だったと推測される。
	壕の内外には木柵、土塁、逆茂といった敵の侵入を防ぐ柵が施されていた。多数の遺体がまとまって埋葬された甕棺、石棺、土抗墓は、住民や兵士などの一般の人の共同墓地だと考えられている。一方、遺跡の南部と北部にあわせて2つの墳丘墓(それぞれ「北墳丘墓」「南墳丘墓」と命名されている)があり、こちらは集落の首長などの墓ではないかと考えられている。発掘された甕棺の中の人骨には、怪我をしたり、矢じりが刺さったままのもの、首から上が無いものなどがあり、倭国大乱を思わせる戦いのすさまじさが見てとれる。また、ガラス製の管玉などの装飾	・土坑(南北4.3メートル、東西2.2メートル、深さ80センチ)から桃のタネ約2,000個が見つかった(呪術に使用されたとされる) ・3世紀に建造されたとされる建物の柱穴が100箇所以上にわたり検出された。建物を何度も建てたり取り壊したりしたと考えられる[3世紀初めに突然現れた集落で、規模も大きい。 寺沢はこのように述べた後、「このような考古学的・文献学的特徴をトータルに備えた巨大な集落は、3世紀の日本列島には他に存在しない。とすれば、3世紀の纏向遺跡こそが、『ヤマト王権』と呼ばれる列島最初の

	<p>品と一緒に埋葬されたものも多く見つ かっている。</p>	<p>王権の都が置かれた都市であった可能性が きわめて高いといえる」と結論付けている。 ・石野博信は、大和川につながる護岸工事の 施された大溝や祭祀場が検出されたこと、 また、近畿以外の諸地域からもたらされた土器 が異常に多いこと、そして、これらの土器の 構成から纏向には少なく見積もっても 5 人 に 1 人はヤマト以外のクニグニからやって きた人々であろうと推定されることを論拠 として、決して自然発生的なムラではなく、人 工的に造られた都市であるとしている。</p>																		
<p>出土品</p>	<p>多数の土器、石器、青銅器、鉄器、木器 が出土している。勾玉や菅玉などのア クセサリー類、銅剣、銅鏡、織物、布製 品などの装飾品や祭祀に用いられるも のなどがある。</p>	<p>外来系土器の割合</p> <table border="1"> <tr> <td>吉備系</td> <td>: 25%</td> </tr> <tr> <td>伊勢・東海系</td> <td>: 20%</td> </tr> <tr> <td>河内系</td> <td>: 20%</td> </tr> <tr> <td>北陸・山陰系</td> <td>: 17%</td> </tr> <tr> <td>播磨系</td> <td>: 8%</td> </tr> <tr> <td>近江系</td> <td>: 5%</td> </tr> <tr> <td>西部瀬戸内海系</td> <td>: 3%</td> </tr> <tr> <td>紀伊系</td> <td>: 1.5%</td> </tr> <tr> <td>関東系</td> <td>: 0.5%</td> </tr> </table> <p>このように日本全国で作られた と見なされる土器が出土してい る。 古代から交流が盛んで関係が深 かった伊勢国で造られた物と、 伊勢湾を挟んで東側に位置する 尾張国で造られた物が多い。 九州系が少ないので、九州とは 別の勢力であるとも解釈でき るし、すでに九州から畿内に東征 されていたとも解釈できる。</p>	吉備系	: 25%	伊勢・東海系	: 20%	河内系	: 20%	北陸・山陰系	: 17%	播磨系	: 8%	近江系	: 5%	西部瀬戸内海系	: 3%	紀伊系	: 1.5%	関東系	: 0.5%
吉備系	: 25%																			
伊勢・東海系	: 20%																			
河内系	: 20%																			
北陸・山陰系	: 17%																			
播磨系	: 8%																			
近江系	: 5%																			
西部瀬戸内海系	: 3%																			
紀伊系	: 1.5%																			
関東系	: 0.5%																			

		<p>・桃の種</p> <p>出土した大量（2800 個）のモモの種について、放射性炭素（C14）年代測定で「西暦 135～230 年の間に実った可能性が高い」との分析結果が出た。</p> <p>桃の実は古代祭祀においては供物として使われており、弥生時代の遺跡で多く見つかるが、1ヶ所で出土したタネ数としては国内最多である。</p>
--	--	--

寺沢薫氏は、「ヤマト王権の誕生-王都・纏向遺跡とその古墳」の中で、纏向遺跡の特徴と特異性を 6 点挙げている。

- ・ 3 世紀初めに突然現れた集落で、規模も大きい。
- ・ 搬入土器が多く、その搬出地は全国にまたがっている。遺跡規模は大規模で市的機能を持っていた。
- ・ 生活用具が少なく土木具が目立ち、巨大な運河等の土木工事が行われている。
- ・ 導水施設と祭祀施設は王権祭祀。王権関連建物。吉備の王墓に起源する弧帯文、特殊器台・壺など。
- ・ 居住空間縁辺に定型化した箸墓古墳、および纏向型前方後円墳。
- ・ 「このような考古学的・文献学的特徴をトータルに備えた巨大な集落は、三世紀の日本列島には他に存在しない。とすれば、三世紀の纏向遺跡こそが、『ヤマト王権』と呼ばれる列島最初の王権の都宮が置かれた都市であった可能性がきわめて高いといえる」と結論付けている。

7.倭種の国

魏志倭人伝に

『「女王国の東、海を渡って千余里（70～90 キロメートル）で、また国が有り、皆、倭種である」、「また、侏儒国がその南にある。人の背丈は三、四尺（72cm～96cm、1 尺は 24.19 センチメートル）で、女王国を去ること四千余里。また裸国と黒齒国があり、またその（女王国の）東南にある。船で一年ほど行くと着くことができる』とある。

「魏志倭人伝」の原文は、句読点もなく、章や節などもわけられていない。前段と後段を二つの文章に分別したのは後世の日本人たちであるが、一つの文章としてとらえるべきである。

多くの専門家の間では、後段の小人国、裸国、黒齒国は架空の話とされている。確かに魏使が見聞した情報でとは思えないし、極めて奇妙な話なので誰の眼にも架空に映るはずだろう。だが前段の「倭種の国」は史料価値があるとされ、九州説論者の中には、この倭種の国は四国が該当するが、畿内説の場合には該当する倭種の国が無いとし、これを最大の根拠として九州説が正しいと主張している大学教授もおられるようだ。そして畿内説論者の学芸員の中にもこの点で苦慮している方もおられるようだ。しかし、このような解釈が正解なのだろうか？この項の中でもこの倭種の国より遠い侏儒国、裸国、黒

齒国は具体的に国名を書いている。この項以外もクニの名前は全て明記されているのに、この女王国のわずか千余里にあったとする「倭種の国」だけがクニの名が書かれていないのは不自然である。これは侏儒国、更には裸国と黒齒国ははるかに遠いのでという話の流れとしてその間の千余里のところに倭種の国があることにしたと解釈すべきではないだろうか。この後段は架空とし、前段だけを取り上げるとするのは文献史学的に見ておおいに疑問である。この前段と後段は一つの文章であり、文章全体が架空である。それゆえ、この奇妙な倭種の国も架空とすべきなので、邪馬台国の位置特定の決め手にはならない。この逸話のような項全てを邪馬台国論争から除外すべきであろう。

遠くに在って国名だけしか分からないとして

「斯馬国、己百支国、伊邪国、都支国、弥奴国、好古都国、不呼国、姐奴国、對蘇国、蘇奴国、呼邑国、華奴蘇奴国、鬼国、爲吾国、鬼奴国、邪馬国、躬臣国、巴利国、志惟国、烏奴国、奴国」とここでも全ての国の名前が記されている。(魏志倭人伝のクニの名前や人名は全て中国側でつけたもの) これらも全て具体的に国名が書かれている。

9. 「不弥国から投馬国まで水行 20 日、更に水行 10 日で上陸し、陸行一月 (30 日) で邪馬台国に至る」について

魏志倭人伝によると

『「(不弥国から) 南、投馬国に至る。水行二十日である。官はビビといい、副はビビダリという。およそ五万余戸。」

「南、邪馬壱国に至る。女王の都とする所なり。水行十日、陸行一月なり。官は伊支馬 (いしま) 有り。次は弥馬升 (みまのすくね) と曰ひ、次は弥馬獲支 (みまくち) と曰ひ、次は奴佳鞮 (ぬかて) と曰ふ。七万余戸ばかり。」』とある。

誤記・誤写説以前にまずはこの倭人伝の記述に合致するルートの有無を検証すべきである。

①九州説

九州説の中には、「九州の沿岸を船で南下すれば 30 日くらいで鹿児島辺りにたどり着く」としている。そこから一月もかけて南下できるような陸上のルートが無いので、一月 (ひとつき) は 1 日 (いちにち) の誤写であるとか、「水行 10 日または陸行 1 月」と読み変えた説とか、倭人伝の行程の記述をほぼ無視した説もあるようだ。白崎勝著; 「魏志行程の検証」によると「調べると唐津市から鹿児島湾の宮浦宮まで水行十日で到着」のようなことを記載している。その根拠となる資料は示されていないが、せいぜいそのくらいではないかと思われる。やはり水行 30 日だとはるか海上まで通過してしまうという距離感、陳寿、范曄、それに現代の多くの専門家にほぼ共通している。

それに、邪馬台国は伊都国に一大率を置き、諸国を監察させている。吉野ケ里遺跡は伊都国と近いので、邪馬台国が吉野ケ里遺跡だとすれば直接諸国を監察できるので、矛盾がある。

何より、卑弥呼の墓候補にあてはまる古墳が全く見当たらない。

②瀬戸内海を水行する畿内説

魏使一行が方角を誤認し、南ではなく実際には東方に向かったとする畿内説でも、瀬戸内海を吉備国 (投馬国と仮定して) 経由で大阪まで水行し、そこから陸行 1 日で畿内に到着できるので、やはり一月は一日の誤写説としているが、無理があろう。

陸行の日数の問題以外に、この瀬戸内海ルートには疑問がある。魏等の中国勢にこのルートを知られてしまうと容易に侵略されてしまう可能性を秘めているからである。瀬戸内海には防衛網がないので、大阪まで容易に進行され、そこから近い邪馬台国はひとたまりもないことが認識されていたはずであり、このルートを選択しなかったであろう。

話が逸れるが、663年の白村江の戦いで唐に大敗した中大兄皇子（天智天皇）は唐に攻め滅ぼされることを恐れ、北九州の防備を固めるために防人・烽（とぶひ、煙や火によって外敵の侵入を知らせるための施設）を配置するとともに大宰府防衛のため水城・大野城・基肆城を築かせた。対馬から北九州・瀬戸内海を経て畿内に至る一帯に古代山城を築造して防衛網を整備した。瀬戸内海はこの時期まで無防備だった。

当然このリスクは北九州の王国にとってはそれ以上にあった。大陸との往来により大陸の王国がとてつもなく強大であることを知り、存亡リスクがあることを理解した北九州の王の中には大陸の恐怖から逃れるために、存外早い時期に吉備や畿内に移動した可能性が考えられる。それも瀬戸内ルートで船を使って吉備や畿内に存外に短期間で移住できたはずだ。

③瀬戸内海を水行する上総説

やはり一月は一日の誤写説としているが、無理があろう。

海上ルート以外に疑問がある。伊藤邦之著『邪馬台国は上総にあった！』によると魏使一行は吉備国（投馬国）経由で大阪まで30日かけて水行し、そこから上総まで1月かけて上総まで陸行したとしている。十世紀ごろの「倭名衆鈔」にある「上総市原から京までの工程日数が一月だった」を根拠にして、魏使の大阪から上総への陸行一月にほぼ合致するとしている。そして市原にある前方後円墳（型）の神門（ごうど）古墳を卑弥呼の墓と比定している。前方後円墳は一般に200年頃、ヤマト王権の王族の墓として奈良県で発祥し、特に4世紀以降の王権との主従関係において全国的に展開されたが、3世紀中頃、奈良県辺り以外での前方後円墳は唯一神門古墳だけであるとしている。

3世紀中頃の前方後円墳が奈良県以外には見当たらないということには同意できる。がしかし、神門古墳は確かに前方後円墳のような形状をして、3世紀中頃から3世紀末頃にかけて築造したとされているが、前方後円墳は円墳の径と方墳の長さが1対1の割合であるが、神門古墳の方墳部がその比よりかなり小さい。それに径が30mほどであり、魏志倭人伝の「径100歩（145メートル）」に合致しない。それに神門古墳は既に発掘されているが、サイズのみならず奴婢100人余が殉教したような痕跡は全く発見されていないし、それ以外にも卑弥呼を思わせるような発掘物は見つかっていない。

それに、3世紀には、現在の東京辺りは低湿地で魏使一行が通行できるような道路がなかった。奈良時代の771年まで、国司らは船で相模から上総に上陸し、それから下総に北上していた。当時は大阪から上総まで陸行だけで通行できなかったもので、ルートが異なることになる。

○古代道路

（横浜歴史研究会 竹内秀一氏「三浦半島の古代東海道ルートについて」より
東京湾渡海ルートを通った傍証

① 房総半島の国名 房総半島の南が上総国、北が下総国となっている。都から近い順に国名に上下をつける慣行。陸路であるなら逆になったはず。

② ヤマトタケル東征ルートは、古事記・日本書紀のオトタチバナヒメ伝説にあるように東京湾を渡海上総に上陸。ヤマトタケル伝説は古代の（海上渡海の）交通ルートを通行したことを示す。

③武蔵国は当初東山道所属 宝亀2年(771年)以前の武蔵国は東山道所属。陸路では相模国から東北方向に進むためには武蔵国を通過せざるを得ない。武蔵国が東山道所属の時期には東海道は武蔵国を通過しない。七道所属の各国では一国に二つの官道は原則通過しない。（近江国は東山道、東海道の2道が通過するが、これは近江国が都に隣接するための例外）初期東海道が陸路武蔵国を通過していたなら武蔵国は当初から東海道所属であったはず。



なぜ初期古代東海道は海上ルートをとったのか 初期古代東海道建設時期には現在の東京低地の地盤は安定していなかった。東京低地は利根川、荒川が氾濫を繰り返す一面の低湿地で官道の建設は困難であったからである。

3 世紀中頃に魏使一行が通行できるような道路が存在していたことも検証した上で邪馬台国を検証すべきであらう。

④ 日本海を水行する畿内説



当時、交易等で北九州大陸や倭国内でもよく知られている日本海沿岸を水行し、投馬国を經由して但馬国（『古事記』には「多遲摩国」と書かれている）辺りで上陸し、そこから一月かけて陸行するルートである。

最初に投馬国は大陸側が一方的につけた名前であるが、その投馬国が古代出雲（島根県東部および鳥取県西部を中心に栄えた）という説である。

古代出雲は紀元前 1 世紀ごろから日本海ルートの重要な役回り演じ始めたが、最盛期は 2 世紀から 3 世紀頃とされる。

魏志倭人伝に

「不弥国から）南、投馬国に至る。水行二十日である。官はビビといい、副はビビダリという。およそ五万余戸」とある。

戸数五万余戸とすれば出雲の人口はざっくりの話だが 6 人/戸とすれば 300,000 人（話半分しても 150,000 人）と想定され、当時の日本の総人口の少なくとも 1 割以上と推定されるので、このルート上では古代出雲国（律令制の出雲国とは異なる）以外に投馬国の候補はないと言える。やはり候補として古代出雲国がもっともふさわしい。

○古代出雲は丸木舟で容易に交易していた



「古代出雲の交易」によると、縄文時代（紀元前 4 世紀ごろまで）には、島根半島は島だったので、東西 100 キロの天然の水路を形成して交通・交易上の大きなポテンシャルがあった。この出雲水道は冬でも穏やかで丸木舟を使う交易が容易であった。また「古代出雲が強国であったその力の源泉は、東西 100 キロの天然の水路が「鉄の道」、「翡翠の道」の中継地となり、勾玉がこの道に乗って東西に運ばれていたことにある。」（長野正孝氏）。そして出雲水道の両側が閉じられた後も潟湖（神門水海）の存在が、交易に大きな役割を果たした。

出雲が日本海ルートにおいて重要な役回りを演じ始めるのは紀元前 1 世紀頃からだが、最盛期は紀元 2 世紀から 3 世紀初め頃とされ、邪馬台国時代に重要な日本海交易ルートが存在していたのである。

出雲地方は、すでに弥生時代（3 世紀中頃以前）から青銅器を用いて神を祭ることが盛んに行われていた。1983 年、島根県出雲市菱川町の荒神谷遺跡（こうじんだにいせき）から銅鐸 6 個・銅剣 356 本・銅矛 16 本が出土、同県雲南市の加茂岩倉遺跡から銅鐸 39 個が出土している。青銅器の制作時期は紀元前 2 世紀ごろ、埋納時期は紀元前後から 1 世紀ごろまでとされているようだ。銅剣 356 本は日本最多であり、それまでに全国で発掘されていた銅剣の総数 300 本余りより多かった。当時、日本有数の一大勢力を誇ったことを示している。

「荒神谷遺跡から発掘された銅剣の成分分析を行った結果、中国華北や朝鮮半島の鉛が含まれていた事が判明。弥生時代「2 世紀中頃まで」の出雲は、海外とも交流する大きな勢力であったと考えられる」（歴史学者・瀧音能之氏）

出雲は神話の国である。古事記上巻の記述の 3 分の 1 が出雲に関するものであり、大和朝廷時代になっても、出雲大社の扱いや、記紀における出雲の記述、唯一完本で現存する『出雲風土記』の存在などから、4 世紀ごろ以降のヤマト王権にとっての出雲の重要性が完全に忘れられたわけでないといわれている。これらのことは古代出雲が王国にも匹敵する一大勢力であったことを示している。

総合的に判断して投馬国が古代出雲であることに異論はないであろう。

○上陸地は但馬国？（たじまのくに、兵庫県豊岡市）

魏志倭人伝には

(投馬国から)南、邪馬壹(ヤバキ)国に至る。女王が都を置く所である。水行十日、陸行一月である。官にイシバがある。次はビバショウといい、次はビバクワシといい、次をドカテイという。およそ七万余戸」とある。

上陸地が示されていないが、上陸地は国の規模や歴史を考慮すると但馬国と想定される。魏志倭人伝に国名が書かれていないのは、この地の高官に会わなかったためと推測される。

魏志倭人伝に名前を書いている国は、魏使が官や副官と会って情報を得たから報告書に国名と得られた情報を書いたが、その他の国は、官や副官に会わなかったため情報を得られなかったので報告書に一切書かなかったのではないかと判断され、それで上陸地の名前が書かれていなかったと解釈できる。

古文書では「多遲摩国(たじまのくに)」と表記は、かつて日本の地方行政区分だった律令国の一つ。山陰道に属する。のちに国造をつとめた但遅い麻国造(たじまのくにのみやつこ、たじまこくぞう)……のちの但馬国東部にあたる地域(のちの朝来郡・養父郡周辺にあたる)を支配した。氏族は但馬氏。『専大糾事本紀』『国造本紀』によれば第13代政務天皇の代に竹野君同祖の彦坐王(ひこいますのひこ、第9代開花天皇皇子)の五世孫である船穂足尼(ふなほのすくね)を国造(くにのみやつこ)に定めたという。

このことより、3世紀の但馬には一定の勢力のある氏族がいたと推測され、邪馬台国と往来していたと推測される。

但馬国には、7世紀に整備された山陰道があり京に繋がっていた、3世紀にも魏使一行が移動できるような古道があったと推測する。

但馬国から女王国への陸行のルートは、魏使一行が女王への賜物だけでなく自分たちのある程度の食料を持参し料理しながら、また衣類も持参したためにその移動速度はかなり遅かっただろうし、また一行が通行できるような道路は迂回を要したことなどを考慮すると、邪馬台国までの移動は相当に時間を要したと推測される。さらに倭国の役人が魏使一行に邪馬台国への最短ルートを探られないようにわざわざ迂回して案内した可能性も考えられる。専門家により、行程が特定されることが期待される。

参考に奈良時代に遣隋使が帰りに使った航路を示す



縄文時代の出雲水道から始まる日本海交易ルートは、奈良時代にも使われていた重要なルートであ

る。

小浜は、畿内の色が濃い港町で、律令時代（7世紀後期から10世紀頃まで）からヤマト王権の日本海側の入口として盛えて来た。邪馬台国時代には未開であったので、但馬国で上陸したのであろう。

古代出雲は少なくとも縄文時代から奈良時代まで栄えた、日本海の手運ルートで最も重要な要衝であった。

この日本海ルートで畿内に向かう行程が唯一「水行30日陸行一月」の行程と矛盾がないと言える。

8. 「郡より女王国に至は、万二千里なり」について

魏志倭人伝に

「その南に、狗奴国（くぬこく）有り。男子が王と為る。その官は狗古智卑狗（くこちひこ）有り。女王に属さず。郡より女王国に至るは、万二千余里なり」とある。

これは魏使の報告書ではなく他の資料によるものだろうが、この帯方郡から女王国まで1万2千里は、女王国までの里程が書かれていないので、算出する基本データが無いことになる。単順に計算すると狗邪国から不弥国までが10,700里であり、12,000里から引き算をすると不弥国から邪馬台国までが1300里（100キロメートル程度）となってしまう。水行30日陸行一月」とは距離感に違和感があり過ぎることになる。

元々1万2千里の里程を算出ベースとなるデータが無いので、算出することができるはずがない。単に遠くにあるという表現と解釈すべきであろう。いずれにしても邪馬台国の特定には繋がらないであろう。

そして不弥国から邪馬台国の里程が1300里であるとし「邪馬台国は九州にあった」という説もあるが、この数値に疑問があるばかりでなく、魏志倭人伝中の行程に関する他の記述を全て無視してしまうことには同意しかねる。

「古代の大陸人は、この世界は東西28,000里、南北26,000里と考えていた。つまり帯方郡から12,000里というのは、世界のほぼ辺境である事のたとえである」との説があるので、紹介しておく。

9. 狗奴国（くぬこく）

・正始八年(247年)、(弓遵の戦死を受けて)王頎(おうき)が帯方郡太守(長官)に着任した。倭女王の卑弥呼と狗奴国の男王、卑弥弓呼素(ひみここ、ひみくこ)とは和せず、倭の載斯烏越(そしうえつ)等を帯方郡に派遣して、互いに攻撃しあっている状態であることを説明した。(王頎は)塞曹掾史(さいそうえんし)の張政(ちょうせい)等を派遣した。それにより詔書、黄幢(こうどう、魏の正規軍を示す旗で魏の後ろ盾を示す)をもたらし難升米(なしめ、太夫)に授け、檄文(ともに立ち上がって戦おうと人々に呼びかける文書)をつくり、これを告げて諭した」とある。またその(女王国の)南に狗奴(コウド、コウドウ)国があり、男子が王になっている。その官に狗古智卑狗(コウコチヒコウ)がある。女王には属していない。帯方郡から女王国に至るには、万二千余里である。」とある。

地理理念の倒錯があるので南方向は、現在の地図では東方向であり、畿内の東方向に位置して一大勢力のあった国とすれば伊勢国が候補となろう。専門家による検証が期待される。

伊勢国風土記』逸文によると、

「神武東征の際に派遣された天日別命が、国津神(土着の勢力)の伊勢津彦(イセツヒコ)を追放して伊勢平定を復命し、これを喜んだ神武天皇が神の名「イセ」にちなんで命名したとされる。大和政権の勢力がこの地域にまでおよんだことを神格化したものとする」との説があるので紹介しておく。

神話の虚実はさておき、大和政権以前にそれ相応の一大勢力がこの地に存在していたと言えるであろう。

10. さいごに

放射線炭素 14 年代測定法により古墳の築造時期は特定されていて、5 項で説明したように卑弥呼が死去した 3 世紀中頃に築造された古墳は限られており、更に径 100 歩 (145 メートル) の古墳に合致するのは畿内の箸墓古墳だけとなる。従い卑弥呼の墓候補は箸墓古墳ということになる。古墳を発掘し、100 余名の殉教者の人骨または痕跡、卑弥呼が授かったとされる金印や銅鏡が発見されれば決定的であるが、箸墓古墳は天皇陵に治定 (じじょう) されているので、治定が見直されない限り発掘は至難である。畿内には、築造時期が卑弥呼の墓にあてはまる箸墓古墳があり、築造年代が卑弥呼の宮室にあてはまる大型建物の幕向遺跡があるので畿内が邪馬台国の最有力候補であり、畿内のみが候補として残ることになる。当然のこと、すでに発掘されて殉教者 100 人余の人骨や痕跡がないことが判明している古墳は候補の対象外となる。

3 項で検証したように、東治は誤写である。東治 (とうや) は地名であるが東治 (とうち) という地名はない。会稽の東にある治所 (政務を司る所) を東治としたのは、おそらく東治という地名が無いことに苦慮した後世の日本人の解釈であろう。漢文と地理を熟知している中国の方が読めば、「東治は間違いで、東治の誤写であり、東治は地名で福州市にある」とすぐに分かることである。仮に陳寿が会稽の治所 (じしよ) だと思っていたとしたら「会稽の東にある治所の東」と書いたはずだし、それよりも会稽郡治とかその地名を書いたはずである。西晋の陳寿が魏志倭人伝を著してから筆写を繰り返し、その段階で誤写したか、あるいは南宋時代の版木の段階で誤写したのであろうが、我々が読むことができるのは 12 世紀の版本だけである。この「にすい」と「さんずい」だけはいかにも誤写しように思われる。

結論として、魏志倭人伝の誤記・誤写は会稽東治 (かいけいとうや) を会稽東治 (かいけいとうち) と誤写しただけである。綿々と筆写が繰り返し替えされたが、筆写しか手段の無かった当時、専門家が注意深く丁寧に筆写したからであろう。

陳寿が「邪馬台国は計ると会稽東治の東」(沖縄辺り) と書いているが、この根拠は魏使の報告「水行 30 日陸行一月」を根拠として「陳寿 (または他の人物かもしれないが) が算定した」と捉えるが、陳寿や范曄が邪馬台国を会稽東治の東と考えていることに対し、その後の魏志倭人伝の読者の誰からも異論が出なかったのだから「当時の人達の地理理念は日本列島が九州を頭に南北に連なっている」との証しである。

陳寿の邪馬台国を沖縄辺りとする距離感には移動日数 (水行 30 日陸行一月) からして違和感がないし、范曄や後世の人達の距離感とも大まかに言えば合致している。それに日本海を経由する畿内ルートの距離感にも重なって来る。移動速度には諸説あるが、いずれも一概に確定することが難しいし、現代の我々の里程の感覚とは異なっていると思われる。移動速度の諸説を紹介し検証をすれば良いのだが、以前筆者も試みたことがあるが、多くの仮説が必要で、仮定が多過ぎるため結論を出すのは難しいように思われる。ここでは当たらずとも遠からず、距離感だけにとどめることにする。

邪馬台国候補は畿内とし、「陸行一月」より、船で日本海沿岸を日中に移動し、夜は湊に停泊しながら投馬国を経由して但馬国辺りで上陸し、邪馬台国まで移動したことになる。それなら投馬国とは、また上陸地はどこか、通過した古代道はどこなのかの検証が必要となってくる。魏使一行は倭国の役人に案内され、每晚どこかの湊に停泊したはずだが、投馬国以外については一切触れていないのが残念であるが、全体に名前がある国は高官 (官や副官) の名前、それに戸数他の情報を記載しているが、そ

この高官に会ったからであろう。一方、魏使が高官に会わなかったために公式の情報を得られなかったと思われる国名は一切記載しなかったか陳寿が字数制限のために省いたかもしれないと解釈できる。

『「女王国の東、海を渡って千余里（70～90 キロメートル）で、また国が有り、皆、倭種である」、「また、侏儒国がその南にある。人の背丈は三、四尺（72cm～96cm、1尺は24.19センチメートル）で、女王国を去ること四千余里。また裸国と黒齒国があり、またその（女王国の）東南にある。船で一年ほど行くと着くことができる。」』は一つの文章として読むべきであり、由一国名の書かれていない不自然な倭種の国は8項で検証したように侏儒国、裸国、黒齒国と同様に架空の国であり、邪馬台国の位置に関しての検証対象にすべきではない。

卑弥呼の宮殿の高楼と城柵は確かに吉野ヶ里遺跡に合致しているようである。魏使が吉野ヶ里遺跡は訪問していたような行程の記述は見当たらないが、魏使が見聞したことを報告したのであるから、高楼や城柵を確かに見たのであろう。分らないというのが正直なところである。このことで吉野ヶ里遺跡が卑弥呼の宮殿であると断定されている専門家もおられるようだが、卑弥呼の墓をはじめ、これ以外の魏志倭人伝の記述についての検証と説明がほとんどなされていないようだ。特に古墳に関しては話題を避けているように感じられる。

「日本列島は南北に連なった列島」という当時の人たちの地理理念を受け入れ、箸墓古墳の発掘や、古代道の発掘を踏まえた上で専門家に検証していただけると、魏志倭人伝を読み変えることなく邪馬台国への魏使行程が特定されるでしょう。

「日本列島は九州を頭に南北に連なった列島」という当時の地理理念を否定する根拠は見当たらないし、倭人伝の中でも読みとれる。

その前提で魏志倭人伝を読み解き新解釈も加えたら、誤字・誤写は「会稽東治（かいけいとうち）」のみだったと言える。活字印刷のなかった時代、専門家が我々の想像以上に注意深く筆写をしたことが読み取れる。

邪馬台国が一大率を北九州の伊都国に置いて九州の諸国を檢察させていたことから、邪馬台国が伊都国から遠く離れたところに位置していたことに間違いはないだろうし、それは倭国大乱（*2.）後、邪馬台国が九州の諸国を支配していたことを窺わせる。大乱とあるので、それまでの王が倒されたことになり、その王は吉野ヶ里遺跡を宮殿としていたのかもしれない。

*2. 倭国大乱

魏志倭人伝に

- ・「その国は、元は男子を王としていたが、居住して七、八十年で、倭国は乱れ、互いに攻撃しあつて年を経た。そこで、一女子を共に立てて王と為した。名は卑弥呼という。鬼道の祀りを行い、人々をうまく惑わせた。非常に高齢で、夫はいないが、弟がいて国を治めるのを助けている。」とある。
- ・中国の正史で大乱は、天子/皇帝/王朝の交代があった場合にのみに用いられる。

いつかテレビの歴史番組で中国の専門家3名（いずれも大学教授だったように記憶している）が、異口同音に「魏志倭人伝の邪馬台国は畿内です」と語っていたことを思い出した。根拠なく主張するはずもなく、その理由を説明していたと記憶しているが、そのときは十分に理解できなかったよう思い出せない。が、今思うとそのうちの一人が「当時の中国における日本列島の地理理念」のことを言っていたような気もする。その録画を探してみたが残念ながら見つからなかった。日本の専門家だけでなく漢文に精通した中国の専門家の意見はもっと尊重されるべきと思われる。

纏向遺跡からは全国各地からの土器が出土されているし、幕向く遺跡は祭祀関連遺構になっている、祭祀に使用されたとされる桃の種2800個が出土している、3世紀頃に突然現れた大集落である、北九

州の伊都国に一大率を置き九州等の諸国を監察させていたことから女王国はそれ相当の遠隔地に位置したはずである、それに卑弥呼の墓候補の箸墓古墳に近接している。これらのことは、畿内の纏向遺跡が女王の都・邪馬台国の宮殿であったことを物語っている。

箸墓古墳を発掘し、奴婢 100 余人の人骨やその痕跡、また卑弥呼が魏より授かった金印等が発掘される日がとても待ち遠しく思われる。

添付資料

○魏志倭人伝の原文

倭人在帶方東南大海之中 依山島爲國邑 舊百餘國 漢時有朝見者 今使譯所通三十國 從郡至倭 循海岸水行 歷韓國 乍南乍東 到其北岸狗邪韓國 七千餘里

始度一海千餘里 至對馬國 其大官曰卑狗 副曰卑奴母離 所居絕島 方可四百餘里 土地山險 多深林 道路如禽鹿徑 有千餘戶 無良田 食海物自活 乘船南北市糶

又南渡一海千餘里 名曰瀚海 至一大國 官亦曰卑狗 副曰卑奴母離 方可三百里 多竹木叢林 有三千許家 差有田地 耕田猶不足食 亦南北市糶

又渡一海千餘里 至末廬國 有四千餘戶 濱山海居 草木茂盛 行不見前人 好捕魚鰔 水無深淺 皆沈没取之

東南陸行五百里 到伊都國 官曰爾支 副曰泄謨觚 柄渠觚 有千餘戶 世有王 皆統屬女王國 郡使往來常所駐

東南至奴國百里 官曰兕馬觚 副曰卑奴母離 有二萬餘戶

東行至不彌國百里 官曰多模 副曰卑奴母離 有千餘家

南至投馬國 水行二十日 官曰彌彌 副曰彌彌那利 可五萬餘戶

南至邪馬壹國 女王之所都 水行十日 陸行一月 官有伊支馬 次曰彌馬升 次曰彌馬獲支 次曰奴佳靺 可七萬餘戶

自女王國以北 其戶數道里可得略載 其餘旁國遠絕 不可得詳 次有斯馬國 次有已百支國 次有伊邪國 次有都支國 次有彌奴國 次有好古都國 次有不呼國 次有姐奴國 次有對蘇國 次有蘇奴國 次有呼邑國 次有華奴蘇奴國 次有鬼國 次有爲吾國 次有鬼奴國 次有邪馬國 次有躬臣國 次有巴利國 次有支惟國 次有烏奴國 次有奴國 此女王境界所盡

其南有狗奴國 男子爲王 其官有狗古智卑狗 不屬女王

自郡至女王國 萬二千餘里

男子無大小 皆黥面文身 自古以來 其使詣中國 皆自稱大夫 夏后少康之子 封於會稽 斷髮文身 以避蛟龍之害 今倭水人好沈没捕魚蛤 文身亦以厭大魚水禽 後稍以爲飾 諸國文身各異 或左或右 或大或小 尊卑有差

計其道里 當在會稽東冶之東 (修正?)

其風俗不淫 男子皆露紒 以木緜招頭 其衣橫幅 但結束相連 略無縫 婦人被髮屈紒 作衣如單被 穿其中央 貫頭衣之 種禾稻 紵麻 蠶桑緝績 出細紵 縑 緜 其地無牛馬虎豹羊鵲 兵用矛 楯 木弓 木弓短下長上 竹箭或鐵鏃或骨鏃 所有無與儋耳 朱崖同

倭地温暖 冬夏食生菜 皆徒跣 有屋室 父母兄弟臥息異處 以朱丹塗其身體 如中國用粉也 食飲用籩豆 手食

其死 有棺無槨 封土作冢 始死停喪十餘日 當時不食肉 喪主哭泣 他人就歌舞飲酒 已葬 舉家詣水中澡浴 以如練沐

其行來渡海詣中國 恒使一人 不梳頭 不去蟣蝨 衣服垢污 不食肉 不近婦人 如喪人 名之

爲持衰 若行者吉善 共顧其生口財物 若有疾病 遭暴害 便欲殺之 謂其持衰不謹
出真珠 青玉 其山有丹 其木有柗 杼 豫樟 棖 櫪 投櫃 烏號 楓香 其竹 篠 籐 桃支 有薑 橘
椒 藁荷 不知以爲滋味 有獼猴 黑雉
其俗舉事行來 有所云爲 輒灼骨而卜 以占吉凶 先告所卜 其辭如令龜法 視火坼占兆
其會同坐起 父子男女無別 人性嗜酒 《魏略曰 其俗不知正歲四節 但計春耕秋收爲年紀》 見大人所
敬 但搏手以當脆拜 其人壽考 或百年 或八九十年 其俗 國大人皆四五婦 下戶或二三婦 婦
人不淫 不妒忌 不盜竊 少諍訟 其犯法 輕者沒其妻子 重者滅其門戶及宗族 尊卑各有差序 足
相臣服

收租賦有邸閣 國國有市 交易有無 使大倭監之 自女王國以北 特置一大率 檢察諸國 諸國
畏憚之 常治伊都國 於國中有如刺史 王遣使詣京都 帶方郡 諸韓國 及郡使倭國 皆臨津搜露
傳送文書 賜遣之物詣女王 不得差錯

下戶與大人相逢道路 逡巡入草 傳辭說事 或蹲或跪 兩手據地 爲之恭敬 對應聲曰噫 比如然諾
其國本亦以男子爲王 住七八十年 倭國亂 相攻伐歷年 乃共立一女子爲王 名曰卑彌呼 事鬼
道 能惑衆 年已長大 無夫婿 有男弟佐治國 自爲王以來 少有見者 以婢千人自侍 唯有男子
一人 給飲食 傳辭出入 居處宮室 樓觀 城柵嚴設 常有人持兵守衛

女王國東渡海千餘里 復有國 皆倭種 又有侏儒國在其南 人長三四尺 去女王四千餘里 又有
裸國 黑齒國 復在其東南 船行一年可至

參問倭地 絕在海中洲島之上 或絕或連 周旋可五千餘里

景初二年六月 倭女王遣大夫難升米等詣郡 求詣天子朝獻 太守劉夏遣吏將送詣京都

其年十二月 詔書報倭女王 曰

「制詔親魏倭王卑彌呼

帶方太守劉夏遣使送汝大夫難升米 次使都市牛利 奉汝所獻男生口四人 女生口六人 斑布二匹二丈
以到

汝所在踰遠 乃遣使貢獻 是汝之忠孝 我甚哀汝 今以汝爲親魏倭王 假金印紫綬 裝封付帶方太守假
授 汝其綬撫種人 勉爲孝順

汝來使難升米 牛利涉遠 道路勤勞 今以難升米爲率善中郎將 牛利爲率善校尉 假銀印青綬 引見勞
賜遣還

今以絳地交龍錦五匹《臣松之以爲地應爲緋 漢文帝著皁衣謂之弋緋是也 此字不體 非魏朝之失 則傳
寫者誤也》絳地縹粟罽十張 舊絳五十匹 紺青五十匹 答汝所獻貢直 又特賜汝紺地句文錦三匹 細班華
罽五張 白絹五十匹 金八兩 五尺刀二口 銅鏡百枚 真珠 鉛丹各五十斤 皆裝封付難升米 牛利 還
到錄受 悉可以示汝國中人 使知國家哀汝 故鄭重賜汝好物也」

正始元年 太守弓遵遣建中校尉梯儁等 奉詔書印綬詣倭國 拜假倭王 并齎詔賜金帛 錦 罽 刀
鏡 采物 倭王因使上表答謝詔恩

其四年 倭王復遣使大夫伊聲耆 掖邪狗等八人 上獻生口 倭錦 絳青縑 緜衣 帛布 丹木 狝
短弓矢 掖邪狗等壹拜率善中郎將印綬

其六年 詔賜倭難升米黃幢 付郡假授

其八年 太守王頌到官 倭女王卑彌呼與狗奴國男王卑彌弓呼素不和 遣倭載斯 烏越等詣郡 說相
攻擊狀 遣塞曹掾史張政等 因齎詔書 黃幢 拜假難升米 爲檄告諭之

卑彌呼以死 大作冢 徑百餘步 狗葬者奴碑百餘人 更立男王 國中不服 更相誅殺 當時殺千餘

人 復立卑彌呼宗女壹與年十三爲王 國中遂定 政等以檄告喻壹與

壹與遣倭大夫率善中郎將掖邪狗等二十人 送政等還 因詣臺 獻上男女生口三十人 貢白珠五千孔 青大句珠二枚 異文雜錦二十匹

参考資料

- ・伊藤邦之著；「邪馬台国は上総にあった！」（上総説）
- ・白崎勝著；「魏使行程の検証」（九州説）
- ・横浜歴史研究会 竹内秀一著；「三浦半島の古代東海道ルートについて」
- ・前之園亮一著；「古事記が語る 王権と愛情の歩み」
- ・蛭田喬樹著；「倭人伝」の行程」
- ・木佐敬久著；「かくも明快な魏志倭人伝」
- ・王，巍（おう、ぎ）著；「中国から見た邪馬台国と倭政権」
- ・ウイキペディア

以上